

謝靈運の賦(一)

謝靈運の賦は現在、十四首が伝えられている。その中には「撰征賦」「山居賦」のような完全なものもあるが、その他は類書などに引用されている不完全な作である。今それらを制作時期の推定できるものと、できないものに分けて挙げる、次のようである。

〔制作時期を推定できる作品〕

- 1、撰征賦：東晋・義熙十二年（四一六）北伐の軍を進めた劉裕を、天子の命で彭城に慰問した時の作。『宋書』謝靈運伝。
- 2、帰途賦：永嘉太守を辞した時。景平元年（四二三）の作。『芸文類聚』卷二七。
- 3、辞禄賦：永嘉太守を辞した時（四二三）の作。『芸文類聚』卷三六。
- 4、山居賦：永嘉太守を辞して始寧の別墅で暮らしていた時（元嘉元年〜二年）の作。『宋書』謝靈運伝。
- 5、傷己賦：廬陵王劉義真の死（四二三）を傷んでの作。『芸文類聚』卷三四。
- 6、逸民賦：始寧に隠棲していた時の作と考えられる。

第一次の隠棲か第二次の隠棲かわからない。『芸文類聚』卷三六。

7、入道至人賦：6「逸民賦」と同じ時期の作と考えられる。『芸文類聚』卷三六。

8、孝感賦：臨川内史として赴任する途中の作。元嘉九年（四三二）。『芸文類聚』卷二〇。

9、感時賦：臨川内史の時か、広州に徙された時の作。『芸文類聚』卷三四。

10、嶺表賦：広州に徙される途中の作。元嘉十年（四三三）。『北堂書鈔』卷一五八・『芸文類聚』卷八。

〔制作時期の推定できない作品〕

- 1、羅浮山賦：作られた時期は未詳。『北堂書鈔』卷一五八・『芸文類聚』卷七。
 - 2、怨曉月賦：作られた時期は未詳。『芸文類聚』卷一・『初学記』卷一・『太平御覽』卷四。
 - 3、長溪賦：作られた時期は未詳。『芸文類聚』卷九。
 - 4、江妃賦：作られた時期は未詳。『芸文類聚』卷七
- 九・『初学記』卷一九・『太平御覽』卷三八一。

森野繁夫

以下、順を追って訳注と解説を加えることにするが、「撰征賦」と「山居賦」については、いずれも既に『謝康樂詩集』に収めた『宋書』謝靈運伝のなかで訳注を付しているもので、ここでは一首の構成だけを挙げることにする。この度は、1「撰征賦」、2「辞禄賦」、3「帰塗賦」について扱う。

一、撰征賦

東晋の末、安帝の義熙十二年（四一六）八月、劉裕は北方領土奪回の軍を進めて九月に彭城に到着、十月には洛陽に至って後秦の姚洸（姚泓の弟）を降し、晋の五陵を修復して彭城に還った。そうして翌十三年正月には長安に向かつて軍を進め、九月に長安に至って姚泓を降している。時に謝靈運は、中軍將軍・監太尉留府事であった劉義符（劉裕の長子）の諮議參軍であったが、帝の命によって、彭城に一時帰休している劉裕を慰問するため使者として遣わされた。十二年十一月に都を出発し、十二月初めに彭城に到着したようであるが、その間の旅の様子を「撰征の賦」としてまとめた。約千四百字の長篇で、旅の途中に経過する土地にまつわる新旧の故事が記されているが、それだけでなく、折々の靈運の思いが随所に織り込まれている。この作品は既に『謝康樂詩集』

付録の『宋書』謝靈運伝に訳注を載せたので、ここではその概略を挙げるにとどめる。

「撰征賦」は序と本文から成り、序では、

- 一、北地奪回の願い。
- 二、相公劉裕の北伐開始。
- 三、相公北伐の経過と成功。
- 四、相公慰問の勅命を受けて彭城へ向かうこと。祖父謝玄についての思い。

が述べられており、それを承けて本文では次のような事柄が記されている。

- 一、劉裕慰問のために彭城へ赴くこと。
 - 1、輝かしい晋王朝の系譜。
 - 2、不甲斐ない自分の勤務ぶり。
 - 3、古くからの、中国と北虜の関係。
 - 4、劉裕の善政と北伐の決意。
 - 5、北伐成功。
 - 6、天子に相公慰問を命ぜられ、北に向かつて出発すること。
- 二、都建康から江辺まで。
- 1、都の雉門、鍾巖、查塘。
 - 「永嘉の乱」と「建武の中興」、その後の東晋の治乱と劉裕の功績。
 - 2、①治城―王導のこと。

- ② 石頭—呉（孫氏）の興亡と、晋の羊祜の活躍。
- ③ 王敦の反逆（謝鯤・周顛）
- 3、① 四望山に近づく。孫恩・盧循の乱と劉裕の活躍。
- ② 白石では祖峻・祖約の乱。
- 4、① 落星で、呉の遺跡。
- ② 江乗では始皇帝の無謀な行動について。
- ③ 方与、歐陽、広陵における江行の様子。
- 三、江を渡り、淮を過ぎる。
- 1、① 難関「江」のこと。
- ② 広陵では呉王濞のこと。
- ③ 広陵で董仲舒のこと。
- 2、広陵ゆかりの桓温・桓玄、更に謝安のこと。
- 3、津潭、白馬と過ぎて、淮水を渡り、角城に着くまでの旅の様子。
- 4、① 薛において此の地の歴史を振り返る。
- ② 下邳では韓信のこと。
- ③ 沂水では張良のこと。
- 5、① 臣山では劉裕の南燕討伐（第一次北伐）のこと。
- ② 徐州では呂布のこと、「禹貢」に見える当地の産物。
- ③ 靈壁、呂県では、孔子・荘子の教えについて触れる。
- 四、彭城に到着。
- 1、彭城に到着し、此の地に縁のある祖父謝玄の功績を

讀える。

2、彭城にまつわる故事

① 戦国時代・宋国の話。

② 項羽と范増。

③ 楚元王と其の子孫。

五、結び（年が明けて春になり、帰途につく時の思い）

以上が「撰征賦」の概要であるが、この賦を作った謝靈運の意図については既に「謝靈運『撰征賦』について」（広島大学文学部紀要 第五四・五五巻）において述べたので、ここでは其の結論だけを挙げることにする。

「撰征賦」は、単なる道中記ではない。それは当然のことながら誰かが読むことを前提として作られており、靈運の気持ちとしては、広くは時の知識人を、狭くは此の度の慰問の相手である劉裕を意識していたであろう。それでは靈運はどういうことを此の作によって伝えようとしていたのか。そのことをはっきりさせるために、

I 「劉裕に言及している個所」

II 「道筋にそって挙げる古今の人物」

III 「祖父謝玄を登場させている個所」

にまとめ、それらを通して靈運が言わんとしたことを考えてみようと思う。

まず、I 「劉裕に言及している個所」

「序文」では、

2、相公劉裕の北伐開始。

宰相としての劉裕の功績を讃え、天の意志に従って北伐の軍を興したことをいう。

3、宰相劉裕の北伐の様子と成功。

劉裕が北伐軍を指揮して大きな戦果を挙げたことを讃える。

「本文」では、

一、劉裕慰問のために彭城に赴くこと。

4、相公劉裕の善政と北伐の決意。

序文における、2「相公劉裕の北伐開始」の内容と、ほぼ同じ。

5、①北伐の成功。

これも序文の「相公劉裕の北伐の様子と成功」の内容と、ほぼ同じ。序文で述べたことに重ねて、劉裕の功績を讃えている。

二、都建康から江辺まで。

1、東晋末の乱と劉裕の功績。

北伐により、北方異民族の圧力を払いのけて洛陽を回復し、中国に太平をもたらした劉裕の功績を、序文、更に(一)の5①に重ねて記し、強調している。

3、四望にて。孫恩・盧循の乱における劉裕の活躍。

ここでは、孫恩・盧循の乱に際しての劉裕の活躍を

記す。

三、江を渡り、淮を渡る。

5①臣山にて。劉裕の第一次北伐について。

臣山に着いて、劉裕の南燕討伐のことを思い起こし、その大きな功績を讃えている。

以上が、劉裕に関する言及であるが、要するに靈運は、劉裕が宰相として国内を安定させたことと、二度の北伐に成功して国威を示したことを、その偉大な功績として賞賛している。

次にII「道筋に添って挙げる古今の人物」であるが、作者は道筋に添って其の土地に関係のある古今の人物を次々に挙げている。それは紀行の賦として普通の形式であるが、ただそれだけのものではないようである。それは天子に、或いは主家に叛いて滅びていった国、人物が多く記されているからである。すなわち、

「本文」

二、都から建康まで

2②「石頭」呉の滅亡。其の際に功績のあった晋の羊祜のこと。王敦の反逆。

3②「白石」東晋・成帝の時の蘇峻・祖約の乱。其の際に功績のあった庾亮のこと。

4①「落星」呉の滅亡。

②「江乘」秦・始皇帝の無謀な行動。

三、江を渡り、淮を渡る。

- 1 ② 「広陵」 呉王濞、漢に叛いて滅亡。
- 2 ① 「広陵」 桓温の功業。桓玄の帝位篡奪、そうして滅亡。

- 4 ② 「下邳」 漢・韓信の反乱、誅殺。
 - 5 ② 「徐州」 後漢末、呂布の最期。
- 四、彭城到着

- 2 ② 「彭城」 項羽の暴虐と、その最期。
- 2 ③ 「彭城」 楚・元王の子孫が、徳を失って国を除かれたこと。

以上のように、反逆、反乱の末に滅亡し誅殺された事例が列挙されている。

それ以外の事としては、

- 二、2 ① 「冶城」 晋・元帝の股肱の臣、王導のこと。
 - 三、1 ③ 「広陵」 漢の董仲舒について。
 - 2 ② 「広陵」 孝武帝の股肱の臣謝安（謝玄の叔父）
 - 4 ③ 「沂水」 漢の張良。
 - 5 ③ 「呂梁」 孔子・荘子の教え。
 - 四、2 ① 「彭城」 戦国時代・宋国のこと。
 - 2 ② 「彭城」 項羽の謀臣、范増のこと。
- などが挿入されているだけである。したがって霊運が、反逆、反乱、そうして其の結果としての滅亡と誅殺を多く挙げたのは、晋朝に異志を抱いている劉裕に対する諫言のごとき意図があったと見てよからう。それは次の、
- Ⅲ 「祖父謝玄についての言及」とも関わっており、晋朝に忠誠を尽くした謝玄の行動を強調しながらの、反逆・

反乱と其の結末の列挙であったと考えられる。

Ⅲ 「祖父謝玄についての言及」

「序文」においては「其の昔、今は亡き祖父（謝玄）は地方長官として淮・徐州に赴任し、その踏み行った道は『苞桑』よりも固く、勲功は積み重ねられた『仁』に由るものであった。今や年月は過ぎ去り、世の中は既に改まったが、永く其の洪業ゆえに。彼のすばらしき日々が忘れられない」と謝玄の功績を讃え、その謝玄ゆかりの地である彭城へ、このたび劉裕慰問のために赴き、その時の見聞を写し集めて「撰征の賦」を作り、祖父の残した事柄を此の作に託して朽ちざらしめんとするものである、という。

これによれば、祖父謝玄のことを述べるのが主で、劉裕慰問のことはついで、ということになっているが、しかし劉裕の功績を随所で讃え、劉裕側からの口出しを抑えようとしているかのようである。

「序文」で謝玄を讃えたあとは、「本文」においては最後の押さえに到るまでは謝玄のことには触れず、途中、三の2 ②で謝玄の叔父である謝安を出している。肥水の戦いの後、謝安は謝玄と北伐を計画して実行に移していったが、中央の政権交代のために志は適えられなかった。この謝安をつなぎとしながら本文では、彭城に到着したところで（四の1）、晋朝を支え続け、謝安との共同

の志が遂げられないとみると隠遁してその遠志を果たした、理想的な人物として謝玄を持ち出してくる。

以上、I「劉裕に言及している個所」

II「道筋に添って挙げる古今の人物」

III「祖父謝玄に言及している個所」

のそれぞれについて、靈運の意図を推測してみたが、やはり「撰征の賦」を作った狙いは、序文に述べていたように「時運の遷謝するも、此れに託して（謝玄の事跡を）朽ちざらしめん」というところに、結局はあったようである。北伐に成功した劉裕が晋朝篡奪を狙っていることは、既に明白であった。靈運もそれは十分に承知していたに違いない。靈運としては反逆の臣の末路を示したところで、今更なるものでもないとは思っていたであろうが、それでも晋朝の臣としては言っておかねばならなかったであろう。一面では、劉裕のような王朝篡奪の臣の存在によって、祖父謝玄の存在は更に輝かしいものとなることも、また確かなことであった。

ところで「撰征の賦」には、このほかに道中の風景描写がある。人間世界の生臭いことばかり書いては息が詰まりそうになる。適当な個所に靈運は、旅の途中の自然描写を挟み込んでいる。序文には道筋のあらましを、塗は九守を經、路は千里を踰ゆ。江に沿ひ淮を乱り、遡りて泗・派に薄り、詳らかに城邑を觀、周く丘

墳を覽る。のように述べているが、具体的には次のような風景が描かれている。

一、「劉裕慰問のために彭城へ赴くこと」

6「彭城へ出発」

冒沈雲之掩藹	沈雲の掩藹たるを冒し
迎素雪之紛霏	素雪の紛霏たるを迎ふ
凌結湍而凝清	凌は湍に結びて清を凝らし
風矜籟以揚哀	風は籟に矜りて以て哀しきこえを揚ぐ
情在本而易阜	情は本に在るも阜にし易く
物雖末而難懷	物は末と雖も懷ふこと難し
眷余勤以就路	余を眷るに勤めて以て路に就き
苦憂來其城頽	苦憂の來りて其れ城も頽る

二、「都建康から江辺まで」

4③「江行の様子」

林叢薄路透迤	林は叢薄にして路は透迤
石參差山盤曲	石は參差と山は盤曲す
水激瀨而駿奔	水は瀨に激して駿奔し
日映石而知旭	日は石に映じて旭きを知す
審兼照之無偏	兼照すことの偏る無きを審かにし
怨婦流之難濯	婦流の濯ぎ難きを怨む
羨輕舠之涵泳	輕やかなる舠の涵泳するを羨み
觀翔鷗之落啄	翔ふ鷗の落啄するを觀る

在飛沈其順從
顧微躬而緬邈

飛沈に在りて其れ順從し
微躬を顧りみて緬邈たり

三、「江を渡り、淮を過ぐ」

3 ①「北地の旅の様子」

城坡陀兮淮驚波 城は坡陀として淮は驚き波だち
平原遠兮路交過 平原は遠くして路は交はり過ぐ
面芴野兮悲橋梓 芴野に面ひて橋梓を悲しみ
遡急流兮苦磧沙 急流を遡りて磧沙に苦しむ
夔千里而無山 千里を夔かにするも山無く
緬百谷而有居 百谷 緬かにして 居有り
被宿莽以迷徑 宿莽に被はれて以て徑に迷ひ
覩生煙而知墟 生ずる煙を覩て 墟を知る
謂信美其可娛 謂ふに信に美なるも其れ娛しむ可

けんや

身少長於樂土 身は少きより樂土に長ずれば
実長歎於荒餘 実に長く荒餘に歎ず
○ ○ ○ 具瘁 瘁を具ふるに
值歲寒之窮節 歲寒の窮節に値ふ
視層雲之崔巍 層雲の崔巍たるを視
聆悲颯之掩屑 悲颯の掩屑たるを聆く
彌晝夜以滯淫 晝夜に彌りて以て滯淫し
怨凝陰之方結 凝陰の方に結ぶを怨む
望新晴於落日 新晴を落つる日に望み

起明光於躋月 明光を躋る月に起こす
眷轉蓬之辞根 轉蓬の根を辞するを眷りみ
悼朔雁之赴越 朔雁の越に赴くを悼む
彼微物而疚情 彼の微物にして情を疚ましめ
此思心其可說 此の思心 其れ説く可けんや

五、結 び

爾乃孟陬発節 爾して乃ち孟陬 節を発し
雷隱蟄驚 雷は隱き蟄は驚く
散葉萸柯 散葉 柯に萸み
芳藹飾萌 芳しき藹は 萌を飾る
麦萋萋於旄丘 麦は旄丘に萋萋たり
柳依依於高城 柳は高城に依依たり
相雝鳩之集河 雝鳩の 河に集まるを相
覩鳴鹿之食苹 鳴鹿の 苹を食ふを覩る
沂泗遠兮清川急 沂・泗は遠くして 清川は急に
秋冬近兮緒風襲 秋冬 近くして 緒の風は襲く
風流蕙兮水增瀾 風は蕙を流して 水は瀾を増し
訴愁衿兮鑑戚顔 愁衿を訴へて 戚顔を鑑らす
愁盈根而蘊際 愁ひは根に盈ちて際に蘊ち
戚発條而成端 戚しみは條に発して端を成す

そこには、旅の途中の厳しく寂しい北地の冬の風景、任務を終えて帰国を待ちながらの初春の風景が、詠われている。しかし、祖父謝玄の活躍も空しく、やがて訪れる

であろう東晋王朝の末路を悲しんでか、はたまた王朝が交代した後に遭遇するはずの謝家の困難を思つてか。靈運の心は常に愁いに満ちているようである。

二、辞禄賦

この賦は「初めて郡を去る」詩、および「帰塗の賦」と同じ頃に、すなわち景平元年（四三三）永嘉太守を辞して始寧に帰つた秋に作られたものと考えられる。『芸文類聚』卷三六・隱逸上に引かれているもので、完全なものではない。

辞禄賦

禄を辞するの賦

荷賞延之渥恩

賞延の渥き恩を荷ひ

在弱齡而覃惠

弱齡に在りて覃き恵みあり

蒙聖達之眷顧

聖達の眷顧を蒙り

得乘間以沈泄

間に乘じて以て沈泄するを得たり

雖鑣羈之有名

鑣羈の名有りと雖も

恒遊樊而匪滯

恒に遊樊して滯るに匪ず

解龜紐於城邑

龜紐を城邑に解き

反褐衣於丘窟

褐衣に丘窟に反る

判人事於一朝

人事を一朝に判じ

与世物乎長絶

世物と長く絶つ

自牽綴於朱絲

朱絲に牽綴れて自り

奄二九於斯年

奄かに斯の年に二九なり

服纓佩於兩宮

纓佩を兩宮に服し

執鞭笞於宰蕃

鞭笞を宰蕃に執る

【語釈】

「荷賞延之渥恩」「賞延」は、『尚書』大禹謨に「罰弗及嗣、賞延于世」（罰は嗣に及ばず、賞は世に延ぶ）とある。「延」は、及ぶ。先祖の功績に対する賞が、

我が身にまで及ぶこと。祖父の謝玄を意識している。「在弱齡而覃惠」「弱齡」は、弱年の意。『礼記』曲礼

に「人生十年曰幼、二十曰弱」（人生まれて十年を幼と曰ひ、二十を弱と曰ふ）とある。「覃惠」は、君主

の深い恵み。孔安國「尚書序」に「承詔為五十九篇作伝。於是遂研精覃思」（詔を承けて五十九篇の為に伝

を作る。是に於て遂に精を研き思ひを覃くす）とある。

「蒙聖達之眷顧」「聖達」とは、天子を指す。「眷顧」は、目をかけられること。天子（劉裕）の恩顧を被つ

たことをいう。「得乘間以沈泄」「乘間」は、ひまをよいことにして。

「沈泄」は、横着をすることか。「雖鑣羈之有名」「鑣」は、馬のくつわ、「羈」

は、たづな。ここは官職に拘束されていることをいう。「恒遊樊而匪滯」「遊樊」は、山水自然を遊行して其の

美しさを見て回ること。

「解龜紐于城邑」永嘉太守を辞することをいう。「龜紐」は太守の印綬。「城邑」は、永嘉郡治を指す。

「反褐衣于丘窟」始寧の墅に帰ることをいう。「褐衣」は身分の低い者の着る毛織りの衣服。「丘窟」は始寧の墅を指す。

「判人事于一朝」「人事」は、人間社会の事柄。それと一旦にして離れる。

「世物」世俗にかかわりのある物。

「自牽綴于朱絲」「牽綴」は、引きとどめる。『三国志』

呉書の周鮑伝に「牽綴往兵、使不得速退者、則善之善也」(往兵を牽綴し、速やかに退くことを得ざらしむれば、則ち善の善なる者なり)とある。晋・義熙元年

(四〇五)に、最初の官として琅邪王大司馬行参軍に任じられたことをいう。「初去郡」詩では「牽絲及元興、解龜在景平。負心二十載、於今廢將迎」(絲に牽かるるは元興に及び、龜を解くは景平に在り。心に負くこと二十載、今に於て將迎を廢す)とある。「元興」は四〇二年から四〇四年までであるから、四〇五年の大司馬行参軍就任以前に仕官していたことになる。本伝に「国公の例を以て、員外散騎侍郎に除せらるるも就かず」とあることと関係があるのか。或いは概算によるか。なお「景平」は四二三年から四二四年六月まで。靈運は景平元年秋に永嘉太守を辞した。

「奄二九于斯年」「斯年」とは永嘉太守を辞した年で四二三年。それより十八年前とは、大司馬行参軍になつ

た年である。

「服纓佩于兩宮」「纓佩」は、高官をいう。「纓」は冠のひも。「佩」は佩玉で、身分の高い者が大帯に懸けて飾りとした。「兩宮」は、朝廷と太子の宮を指す。

「執鞭笞于宰蕃」「鞭笞」は、馬の鞭と記録用の板。「執鞭笞」は、職務に従事することをいう。「宰蕃」は永嘉郡太守をいう。

【訳】

録を辞するの賦

前代からの渥い君恩を受け

弱年の頃から覃い恵みを頂いた

聖達の君の眷顧を蒙つて

暇に乗じて好き勝手なことをした

官職についてはいたが

恒に遊奨して じつとしていることが無かつた

このたび太守の印綬を城邑において解き

山の住みかでの布衣の暮らしに反る

世の中の諸事と一旦にして手を切り

世間の物事と長く関わりを絶つことにした

「朱絲」に繋がれてより

今年まで 瞬く間の十八年

朝廷と太子の役所に仕え

地方の長官としての任務に就いた

(以下脱す)

【補説】「初去郡」について

謝靈運は永初三年（四二二）七月に永嘉太守として郡に向かい、一年後の景平元年の秋に其の職を去って始寧に帰った。これは其の時、郡を去るにあたっての作である。（『文選』卷二六、『焦本』卷三、『詩紀』卷五八、『三謝詩』『類聚』卷五〇引「英・明」二韻）

初去郡

初めて郡を去る

彭薛裁知恥	彭・薛は 裁かに恥を知るも
貢公未遺榮	貢公は 未だ榮を遺れず
或可優貪競	或いは貪競に優る可きも
豈足称達生	豈に達生と称するに足らんや
伊余秉微尚	伊れ余は 微尚を秉り
拙訥謝浮名	拙訥にして 浮名を謝せんとす
廬園当棲巖	廬園を 棲巖に当て
卑位代躬耕	卑位を 躬耕に代ふ
顧己雖自許	己を顧りみて 自ら許すと雖も
心迹猶未并	心と迹とは 猶ほ未だ并はず
無庸妨周任	庸無くして 周任を妨ふも
有疾像長卿	疾有るは 長卿に像たり
畢娶類尚子	娶るを畢るは 尚子に類て
薄遊似邴生	薄遊は 邴生に似たり
恭承古人意	恭みて古人の意を承け
儼裝反柴荊	儼めて装ひて 柴荊に反る

牽絲及元興	絲を牽くは 元興に及ぶも
解龜在景平	龜を解くは 景平に在り
負心二十載	心に負くこと 二十載
於今廢將迎	今に於て 將迎を廢す
理棹遄還期	棹を理めて 還る期を遄くし
遵渚坳脩鷺	渚に遵ひて脩き坳を鷺す
遡溪終水涉	溪を遡りては 終に水涉し
登嶺始山行	嶺に登りては 始めて山行す
野曠沙岸淨	野は曠くして 沙岸は淨く
天高秋月明	天は高くして 秋の月は明らかなり
憩石挹飛泉	石に憩ひては 飛泉を挹み
攀林摯落英	林に攀じて 落英を摯る
戰勝驪者肥	戦ひ勝ちて驪せし者も肥え
止監流婦停	止むるに 監みて流れは停まるに帰す
即是羲唐化	是の羲唐の化に即きて
獲我擊壤情	我が擊壤の情を獲たり

郡を去るにあたって

彭宣と薛広徳は いささか恥を知って官を退いたが、貢禹は結局 榮位を遺れることはできなかつた。彼らは榮譽を貪り競う者に比べれば優れているかもしれないが「生に達している」と どうして言うことができようか。さて私は微か好みを持っており、世渡りが拙いといふこともあって、浮いた名声を求めることは止めようと思つていた。そのため粗末な小屋と庭を隱棲の住みかと

見なし、卑い地位を躬ら耕すことの代わりとしていた。そうして己を顧りみて、自分ではこれでよかろうと考えていたのだが、心と行いとは、やはりどうも、びったりとは一致しなかった。

これまで功績も無いのに役に就いていた点は周任の言葉に背いていたが、病気であったことだけは司馬長卿に似ていた。息子に嫁を娶って官を止めるのは尚先生に類しており、薄禄で仕えて満足していたのは邨殿に似ている。今や恭んで古人の志を承けつぎ、ここにはじめて旅支度を整え、我があばらやに帰ろうとする。

その初め、官に仕えたのは元興の年にさかのぼり、龜印を解いて官を去るのは景平の年である。心に背くこと二十年、今にしてようやく送り迎えの気苦労を廃てることができた。

舟の支度をして、還る時期をはやくし、渚に遵って脩く続く野原を馳せてゆく。溪川を遡っては、ようやく水を涉ることができ、嶺に登っては、始めて山歩きができた。野はどこまでも曠く、沙岸は清らかであり、天は高く、秋の月が明らかに輝いている。石の上で休憩して飛び散る瀧の水を手で汲んだり、林の中に分け入っては散った花びらを拾ったりする。

戦いに勝って、痩せていた私も肥え、止水に映して揺れる心も静かな状態に帰った。庖羲や堯の治化のもとに暮らすことになり、我が「擊壤の歌」を歌う気持ちになることができたのだ。

三、帰塗賦

靈運は少帝の景平元年（四二三）の秋、永嘉太守を一年間で辞して始寧の別墅に帰った。その間の事情について、『宋書』謝靈運伝には次のように記す。

少帝、位に即き、権は大臣に在り。靈運は異同を構扇し、執政を非毀す。司徒徐羨之らは之を患ひ、出だして永嘉太守と為す。郡に名山水有り、靈運の素より愛好する所なり。出だされて守となり既に志を得ざれば、遂に意を游邀に肆にし、諸県を遍歴して、動もすれば旬朔を踰ゆ。民間の聴訟は、復た懐ひに関せず。至る所輒ち詩詠を為し、以て其の意を致す。郡に在ること一周、疾と称して職を去る。従弟の晦、曜、弘微ら、並びに書を与へて之を止むるも、従はず。

この賦は、従弟たちの制止に耳をかさずに始寧の墅に帰る時の作である。『芸文類聚』卷二七・行旅部に引かれているが、後半は欠けているようである。

序

昔文章之士、多作行旅賦。或欣在觀国、或忧在斥徙、或述職邦邑、或羈役戎陳。事由于外、興不自己。雖

高才可推、求懷未愜。今量分告退、反身草沢。経塗履運、用感其心。賦曰、

昔 文章の士は、多く行旅の賦を作る。或いは欣びは国を觀るに在り、或いは仇は斥徙に在り。或いは邦邑に述職し、或いは戎陳に羈役す。事は外に由りて、興は己に自らず。高才 推す可しと雖も、懷ひを求むるに未だ愜はず。今 分を量りて退くを告げ、身を草沢に反す。塗を経 運を履み、用て其の心に感ず。賦して曰く、

【語釈】

「觀国」『易』觀卦に「觀国之光、利用賓于王」（国の光を觀る。用て王に賓たるに利し）とある。王徳の反映である風俗の美を觀る。

「斥徙」却け遷される。左遷されること。

「述職邦邑」「述職」は、諸侯が天子に朝して職務の報告をすることであるが、ここは地方長官として赴任することを意味している。謝靈運「之郡初発都」詩に、「述職期闌暑、理棹变金素」（述職は闌暑を期すも、棹を理むるは金素に变ず）とある。

「羈役戎陳」「羈役」は、任務を帯びての旅。陶潜「雜詩」其の九に「遥遥從羈役、一心処兩端」（遥遥として羈役に從ひ、一心 兩端に処る）とある。「戎陳」は、戦争。戦い。

「事由于外、興不自己」賦に詠ずる事柄は外からのものであつて、自分の心の中に湧いてきた感興ではない。

「雖高才可推」「高才」は、「昔文章之士」を指す。彼らの高才のほどは推しはかることができるのだが。

「今量分告退」いま自分の才能を量った結果、官吏として不適任と考へて引退することにした。

「反身草沢」隱棲の地に反つていく。具体的には始寧の墅を指す。

「経塗履運」旅を続けて月日が経過すること。謝瞻「於安城答靈運」詩に「履運傷荏苒、遵塗歎緬邈」（運を履みて荏苒たるを傷み、塗に遵はんとするも緬邈たるを歎く）とある。

*序文には、これまで行旅の賦の作者たちの心情がよくわからなかつたが、今、自分が官を退いて故郷への道を旅する身になつてはじめて、彼らの気持ちがわかつたことを述べる。

【訳】

昔、文章の士は、行旅の賦を作る人が多かつた。国の光を觀ることを楽しんだり、斥け徙されることを恐れたり、邦邑に赴任したり、戦地に出征したり。それらは事は外からのものであり、興は自分の心から湧き出たものではなかつた。彼らの高才は理解できたが、その懐いは、もうひとつよくわからなかつた。今、自らの分を量つて退職を上告し、草沢に身を反すことになり、旅を続けて日が経つにつれ、其の心に同感できるようになつた。

①承百世之慶靈 百世の慶靈を承け

遇千載之優渥

千載の優渥に遇ふ

匪康衢之難踐

康衢の踐み難きに匪ず

諒跬步之易局

跬歩の局まり易きを諒かにす

踐寒暑以推換

寒暑の以て推し換はるを踐み

眷桑梓以緬邈

桑梓の以て緬邈たるを眷りみる

褫簪帶于窮城

簪帶を窮城に褫きて

反巾褐于空谷

巾褐に空谷に反る

果歸期于願言

歸期を願言に果たし

獲素念于思樂

素念を思樂に獲たり

【語釈】

「承百世慶靈」百代に一度のめでたい神靈に出会う。つまりすばらしい天子の御世に出会ったことを言う。

「遇千載之優渥」千年に一度の、天子の厚い恩沢に遇った。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」（阮瑀）に「慶雲患優渥、微薄攀多士」（慶雲 優渥を恵み、微薄にして多士に攀ぶ）とある。

「康衢」往來の頻繁な大路。ここは安定した政治の大道を意味する。

「跬歩」一足。半歩。

「易局」天につかえそうな気がして、背中を曲げて歩いてしまう。『毛詩』小雅・正月に「謂天蓋高、不敢不局。謂地蓋厚、不敢不躅」（天を蓋し高しと謂ふも、敢へて局まずんばあらず、地を蓋し厚しと謂ふも、敢へて躅らずんばあらず）とある。天地の間に身の置き所が無いことを言う。毛伝に「局は曲なり」という。

「桑梓」故郷のこと。『毛詩』小雅・小弁に「維桑与梓、必恭敬止。靡瞻匪父、靡依匪母」（維れ桑と梓と、必ず恭敬す。瞻るとして父に匪ざるは靡く、依るとして母に匪ざるは靡し）とある。

「褫簪帶于窮城」「褫」は衣服を脱ぐこと。「簪帶」は官吏を象徴している。「窮城」は永嘉郡を指す。

「反巾褐于空谷」「巾褐」は無位無官の者の衣服。「空谷」は人跡稀な山谷を意味する。『毛詩』小雅・白駒に「皎皎白駒、在彼空谷」（皎皎たる白駒、彼の空谷に在り）とある。また靈運の「従弟惠連に酬ふる」詩に「務協華京想、詎存空谷期」（務く華京の想ひに協ふ、詎ぞ空谷の期を存せん）とある。

「果歸期于願言」謝靈運「過始寧墅」詩に「揮手告鄉曲、三載期歸旋。且為謝粉檜、無令孤願言」（手を揮りて郷曲に告げ、三載にして歸旋を期す。且つは為に粉檜を樹えよ、願言に孤かしむる無かれ）とある。「願言」は、願ひ。

*この段は、天子の恩沢に浴しながらも、自分の菲才を知って故郷に帰ることを述べる。

【訳】

百世に一度の立派な天子を戴き、千年に一度の恩沢に遇わせていただきながら。康らかな政治の大道が 歩き難いというわけではなく、自分が背ぐくまった歩き方しのできないことがわかったのだ。

寒暑を経て年月は推し移り、故郷を顧りみれば遙かに

彼方。私は簪と帯を此の辺鄙な町に脱ぎ捨てて、空谷に還って布衣の身分になる。願ひ通りの時期に帰ることができ、平素の思いを楽しみのうちに叶えることができた。

② 于是舟人告辨 是に于て舟人は辨を告げ

佇楫在川 楫を佇めて川に在り

觀鳥候風 鳥を觀て風を候ひ

望景測圓 景を望みて圓を測る

背海向溪 海に背きて溪に向かひ

乘潮傍山 潮に乗じて山に傍ふ

悽悽送婦 悽悽として婦を送り

悠悠告旋 悠悠として旋るを告ぐ

【語釈】

「告辨」「辨」は、別れること。離れること。ここは出発の準備が整ったことを告げる。

「觀鳥候風」風見鳥を見て、風の方角を觀測する。

「望景測圓」太陽を眺め、天候か時刻の測定をするのであろう。「圓」は空のこと。空の様子。

「悽悽送婦」見送る人たちについていう。

「悠悠告旋」「悠悠」は、愁いに満ちているさま。「告旋」は、別れを告げること。

*この段は、舟に乗って永嘉郡を出発する時の様子を詠んだ。

【訳】

かくて船頭は準備のできたことを告げ、川の中程で權

を止めて待つている。風見鳥を觀て風を伺い、太陽を望み空の様子を測る。

海に背を向けて溪川に向かい、潮に乗じて山に傍って行く。人々は悲しい思いで帰るのを送り、私は愁いの思いで別れを告げる。

③ 旻秋之杪節 時に旻秋の杪節にして

天既高而物衰 天は既に高くして物は衰ふ

雲上騰而雁翔 雲は上り騰りて雁は翔び

霜下淪而草腓 霜は下り淪みて草は腓む

捨陰漠之旧浦 陰漠の旧浦を捨て

去陽景之芳蕤 陽景の芳蕤を去る

林乘風而飄落 林は風に乗じて飄落し

水鑿月而含輝 水は月に鑿りて輝きを含む

発青田之枉渚 青田の枉れる渚を発して

逗白岸之空亭 白岸の空亭に逗まる

路威夷而詭状 路は威夷として状を詭しくし

山側背而異形 山は側ち背きて形を異にす

【語釈】

「旻秋之杪節」秋の末の頃。九月頃をいう。

「陰漠之旧浦」「陰漠」は、暗々としたさま。そのような川岸。「旧浦」は、遊びなれた浦。

「陽景之芳蕤」日当たりのいい、草木の花が垂れ茂っている場所。

「発青田之枉渚」「青田」は、青田溪。松陽県（今の浙

江・青田県）境に在り、永嘉江の上流にあたる。

〔逗白岸之空亭〕「白岸亭」は『太平寰宇記』巻九九によれば「楠溪の西南に在り。温州を去ること八十七里。岸の沙の白きに因りて名と為す」とある。靈運に「白岸亭に過る」詩がある。「空亭」は、人の住んでいない亭屋。

〔威夷〕けわしいさま。

〔側背〕そばた時そむち背そむいて、そそり立つている。

*この段は、江行の様子を詠う。秋景のなかを永嘉江を遡って青田から白岸に到る。

【訳】

時に季節は秋も末で、天は既に高く万物は衰えている。雲は高く上って雁は翔び、霜は下り沈んで草は萎れる。暗々とした旧浦を捨て、陽当りのいい芳草の茂る場所を去っていく。林の樹々は風の吹くままに葉を散らせ、川の水は月に照り映えて輝きを含む。

青田の曲渚を発して、白岸の空亭に到着する。路は険しくて怪しげな様子であり、山はそそり立つて形を異にしている。

④停余舟而淹留 余が舟を停めて淹留し

搜縉雲之遺迹 縉雲の遺迹を捜す

漾百里之清潭 百里の清潭に漾ただよひ

見千仞之孤石 千仞の孤石を見る

歷古今而長在 古今を歴て長く在り

經盛衰而不易 盛衰を経て易かはらず

【語釈】

〔搜縉雲之遺迹〕「縉雲」は山名。今の浙江省縉雲県境にある。靈運の『遊名山記』に「縉雲山孤石干雲。可高三百丈。黄帝煉丹于此」（縉雲山は孤石 雲を干す。高さ三百丈ばかり。黄帝 丹を此に煉る）とある。

*この段は、縉雲山下に舟を停めて黄帝的煉薬の遺跡を訪ねたことを記す。

【訳】

我が舟を停めて 久しく留まり、黄帝的の縉雲の遺跡を捜し求めた。百里も続く清潭を漾ただよい、千仞もの高さの孤石を見た。それらは古今を歴て長く存在し、世の盛衰を経て易かわることはない。

*縉雲山から始寧まで、まだかなりの距離があり、この賦にはこの後も途中の様子が次々と詠われていたと考えられる。したがって以上はこの作品の前半と見てよからう。

【補説】「辞禄賦」「帰塗賦」と「初去郡詩」の関わり

「辞禄賦」の「補説」で挙げた「初去郡」詩は、「辞禄賦」と「帰塗賦」を合わせたような内容であるが、同じ内容を、どうして詩と賦の両方に詠まなければならぬのであろうか。どちらか一つでよからうと思うが、何

か理由があるのであろうか。

謝靈運の場合についてみるに、「撰征賦」は、北伐のために彭城に在る劉裕の慰問を命じられ、遙々と都からの旅を続けた靈運が旅行中の見聞と感想を記したもので、これは賦でなければ詠みきれない。また「山居賦」は、始寧の広大な莊園の地理的な様子とそこでの日々の生活について、こと細かに記した作であり、これも賦によらなければ無理であろう。

また「江妃賦」は、江辺で神女の出現を待ち続ける様子を詠じ、「羅浮山賦」は、夢の中で神仙の山である羅浮山に遊ぶことを詠じた空想の作であり、これも詩にはまとめきれない題材であろう。

「逸民賦」は、「清風」に御し「白雲」を払って人間の世界の外に遊ぶ「逸民」のことを詠い、「入道至人賦」は、「道」に没入し「真」の中に住んでいる「至人」を取り上げている。「逸民」も「至人」も靈運の憧れの存在で、かくありたいという作者の願いを込めてのものであるが、これも詩の題材としては相応しくないように思う。

以上の「江妃賦」「羅浮山賦」「逸民賦」「入道至人賦」は、いずれも部分的に残っている作品であるが、内容的にみて詩よりも賦で扱うのに適していると考えられる。

この他に「傷己賦」「孝感賦」「感時賦」「嶺表賦」また「怨曉月賦」「長溪賦」などがあり、いずれも靈運自身の体験にもとづく作である。しかし完全な形ではなく、

中には「長溪賦」のように僅か六句、「怨曉月賦」は八句と、部分的にしか残っておらず、その内容が賦に適したものであるか否かについては判断をしかねる。

「辞禄賦」「帰塗賦」ともに完全な形ではなく、部分的なものではあるが、それでも「初去郡」詩とを比較してみるに、賦の方が、広く人々の目に触れるであろうことを意識しての、いささか構えたような作であり、詩は個人の心情をそのままに表現した作であるように思われる。例えば賦の方にはどちらの作品にも天子の厚恩を謝する部分が設けられているが、詩ではそのようなところは無く、個人的な心情が述べられているだけである。

形式の面では、詩が五言の定形であるのに対して、賦の方は内容や場面に応じて、四言でまとめたり六言でまとめたりと変化を持たせることができるし、また内容に応じていくらでも長く続けることもできる。それだけ表現の幅が認められているということもあって、同じ内容を扱っても詩とは異なった展開が可能であった。

同じ題材を詩と賦の両方で扱うことは、もちろん謝靈運に始まるものではなく、既に建安の詩人たちの間において行われていた。そのことについて鈴木修次氏は『漢魏詩の研究』（建安詩考）で次のように述べられる。

賦においては、作中の人物を包含する情景の設定、より華麗な、より繊細な、より綿密な、題材によっては、より豪壮な、より絢爛な描出に、もっぱらの関心がそそがれると考えられる。しかし詩においては、設定さ

れた人物の情感に迫り、そこに作者の自己を投入させ、密着させることに、むしろ努力がはらわれ、作者は、作中の人物の内面に、より直接に食い込んでゆこうとするかに思われる。こうしてすなわち、制作の発想において、情景の密画的羅列を志すならば、それは賦の方向であり、内面の吐息に作者の自己を投入させるならば、それは詩の方向であると考えて良いのではなからうか。少なくとも建安の文人たちは、詩と賦とを、ほぼそうした意識においてとらえていたのではないだろうか。

六朝においても此の論は当てはまるように思うが、結論はしばらく保留にしておく。なお「謝靈運の賦」(二)では「山居賦」「傷己賦」「逸民賦」「入道至人賦」について扱う予定にしている。